光明寺通信

こうみょう

第３号

この如来は光明なり。光明は智慧なり。
智慧はひかりのかたちなり。
親鸞聖人著作『一念多念文意』

草花がきれいな季節になってまいりました。みなさま、お花見には出かけられましたか？

春はお釈迦さまの季節だと感じる方が、どれほどいらっしゃるでしょうか？　なぜかと言いますと、今から二五〇〇年ほど前（諸説あり）、お釈迦さまは、北インドの釈迦族の皇太子として、四月八日にご誕生されたと伝えられているのです。

ですから、多くの仏教寺院では、お釈迦さまの誕生をご縁として、春には「花まつり」が催されます。

お釈迦さまが覚りをひらいて、仏陀となることから、仏教の歴史が始まりました。しかし、私たち真宗門徒がご本尊として礼拝しているのは、お釈迦さまではなく「阿弥陀如来」なのですね。

それには、大切な意味があります。ご本尊は「阿弥陀如来」でなければならないのです。

ということで、今回は「ご本尊・阿弥陀如来」について、特集することといたしました。

東本願寺・同朋会館
私（住職）が勤務している、宿泊のできる奉仕施設です

第３号
2017 年 4 月 15 日発行

発行責任者
〒135-0013
東京都江東区千田９－７
真宗大谷派　光明寺
住職　小林尚樹
電話：03-3644-3043
メールアドレス：
koumyouji@sky.plala.or.jp

【巻頭のことば】について③

この如来は光明なり。光明は智慧なり。
智慧はひかりのかたちなり。
『一念多念文意』

この言葉について触れるのも三回目ですので、もうお分かりかと思いますが、「この如来」とは「阿弥陀如来」のことですね。

「阿弥陀」とは、インドのことばを中国語に翻訳するときに、その音（響き）を生かして、漢字を充てたのです。それを、音写と言います。元々の言葉は、「アミタ」です。

この「アミタ」には、二つの意味があり、「アミターバ」と「アミターユス」であると言われます。この「アミタ」に漢字を充てて「阿弥陀」としたので、この「阿弥陀」という文字からは直接に意味を読み取ることはできません。「南無阿弥陀仏」は、「ナモアミターバ」の音写なのです。

元々の「アミターバ」と「アミターユス」を中国語に訳した言葉は、「無量光」と「無量寿」になります。これが、「阿弥陀如来」の意味、はたらきになります。仏陀・釈尊は、「量（はか）りしれない光」のはたらきと「量りしれない寿（いのち）」のはたらきを、「阿弥陀如来」という名前で表現したのです。

ですから、私たちは、この「量りしれない光といのちはたらき」に手を合わせ、礼拝しているのです。人や物に対して、ではなく、はたらきに手を合わせているのです。

光のはたらきとは、具体的には仏の智慧にあたり、いのちのはたらきは仏の慈悲にあたります。そのはたらきが、無量なのですね。

仏像になると、無量の光のはたらき（智慧）を勢至菩薩、無量のいのちのはたらき（慈悲）が観音菩薩として表現されます。これらが、弥陀三尊像です（阿弥陀如来を中心に、両脇に勢至菩薩と観音菩薩）。

弥陀三尊像は、私たちにとって、阿弥陀如来とはどういう仏さまか、ということを目に見える形で表現しているのです。

さて、「南無阿弥陀仏」は音写なので、言葉から意味を読み取ることはできません。意味を表わす言葉が、「正信偈」の最初の一句、「帰命無量寿如来」です。または、二句目の「南無不可思議光（如来）」。あるいは、お内仏で御本尊の右に安置されている「帰命尽十方無碍光如来」になります。

「南無阿弥陀仏」とお念仏するところに、量り知れない光（仏の智慧）と、量り知れないいのち（仏の慈悲）のはたらきに出遇い得た、感謝の気持ちが表わされていると思うのです。その気持ちが、「帰命」（帰依する）ということではないでしょうか。

お脇掛けについて

お内仏には、中心にご本尊を安置し、両脇にお名号をお掛けいたします。

向かって右に、「帰命尽十方無碍光如来（きみょうじんじっぽうむげこうにょらい）」、向かって左には、「南無不可思議光如来（なむふかしぎこうにょらい）」というお名号です。

どちらの名号も「南無阿弥陀仏」を言い替えたものですが、親鸞聖人が特に大切にされたお名号です。「帰命尽十方無碍光如来」は、「正信偈」にも出てまいります、インドの天親菩薩（てんじんぼさつ）の著作に出てくるのですが、「さまたげるものなく十方を尽くし照らす光の仏さまに帰依します」という意味があります。

「南無不可思議光如来」は、中国の曇鸞大師（どんらんだいし）の言葉で、「私たちには思いが及ばない光のはたらきの仏さまに帰依します」という意味があります。

親鸞聖人は、私たちに光となってはたらく真実なるものを依りどころとされたのです。

仏事について・・ここが知りたい！

仏壇の中心には　阿弥陀如来がいらっしゃいますか？

まずは、各ご家庭にある、お仏壇の中をご覧ください。一番上の段の中央には、御本尊が安置されているでしょうか？　浄土真宗のご門徒のお宅に安置される御本尊は、左のような阿弥陀如来の絵像（掛軸）です。

「南無阿弥陀仏」というお名号が書かれた掛軸や、立ち姿の阿弥陀如来の木像は結構ですが、お座りになっている阿弥陀如来像や、阿弥陀如来以外のすべての仏像は、私たちの御本尊とは言えないのです（理由は、前のページに記されていることからです）。

もしかすると、今までにご本尊をお迎えするご縁がなく、中心に、お札のようなものや、御位牌が据えられていることもあるかも知れません。真宗門徒の生活としての礼拝作法を改めて確認するためにも、この機会に、見直されてみてはいかがでしょうか？　御本尊は、本山・東本願寺よりいただくことができますので、お寺まで、お気軽にご相談ください（本山へのお礼金が必要になります）。

さて、そもそも浄土真宗では、仏壇とは言わずに「お内仏（ないぶつ）」と言います。それは、中心に御本尊・阿弥陀如来がいらっしゃるからです。「お内仏」を持つということは、ご先祖様をお祀（まつ）りすることではなく、御本尊、本当に尊いことを私たちが生きる中心にしているということなのです。そのことに、手が合わさるのです。

ご先祖様は、私たちに先んじて阿弥陀如来がいらっしゃる浄土の仏様になっておられるのでしょう。そして、私たちに常にはたらきかけ、願い続け、本当に尊いことに触れるご縁を作ってくださいます。

ですから、亡くなっていかれた方々を想い、お内仏の前で手を合わせることを通して、いまこの私に願われていることに触れていくことになるのです。

仏壇というものは、お金で購入できるものですが、お内仏はお金で取引するものではありません。私たちは、お金では価値が計れない尊いものを、日々大切にしているのです。

光明寺の御本尊（阿弥陀如来立像）は、東京都江東区の重要文化財に指定されています

『江東区の文化財』より

位置：本堂内
制作年代：江戸時代
技法：寄木造、玉眼嵌入、漆箔。白毫・肉髻は水晶製。本体と台座は、本来別のものであったと考えられる。制作年代は江戸時代であるが、鎌倉時代の作風を模している。
総高：51.0 cm
像高：33.0 cm
裾張：8.0 cm

※お寺にお越しいただき、実物をご覧ください。

◆額装ご本尊のご案内◆

―離れて暮らす
お子さんやお孫さんへ―

お念仏が次の世代にも相続されていくことを願い、壁掛けにも対応する額装型のご本尊の授与が開始されました。

現代では、一人暮らしの若者や郷里を離れて生活している家庭にはご本尊が安置されていない場合もあり、お念仏を申す生活とは縁遠い生活を送ることが多くなっています。

また昨今は、従来の伝統的な意匠のお内仏ではなく、周囲の家具や調度品に調和する現代的な意匠のお内仏（現代型仏壇）の需要が増えてきていることから、従来の掛軸型の御本尊をお掛けすることが難しいという声をお聞きします。

こうした声を受け、一人でも多くの方々に「御本尊のある生活」を送っていただきたいという願いから、本山において額装型の御本尊が設定されました。

授与礼金　１０，０００円
高さ：19.5 cm　幅：9.2 cm　奥行：2.8 cm
（付属の台を付けていない状態の寸法です）

本尊（本当に尊いこと）に手を合わせることから、一日を始めたいものです。

※詳しくはお寺にお問い合わせください。
（お寺には実物を安置しています）

永代経法要のご案内

毎年５月の第２日曜日に、「永代経法要」を勤修しております。

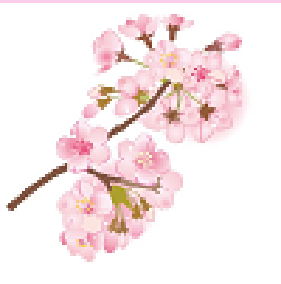
先に亡くなっていかれた方々を仏さまとして、今を生きる私たちが教えに出遇う法要です。

親から子、そして孫へと大切な事柄を引き継ぎ、相続していくことが願われています。

ぜひ一度、ご参詣ください。（ご希望の方は、お寺へご連絡ください）

日時：２０１７年５月１４日（日曜日）午後１時より法要

法話：当寺住職

お斎：２時半ころ～３時半ころまで

会費：お志